

エンタ目

仙頭 武則

■追悼 青山真治へ

映写機のランプが消え、スクリーンが真っ白になった。それでも「その映画」の残像を凝視していた私の目の前を幕が下りていく。「待ってくれ、俺はまだ見てるんだ」と叫んだ。声は届かず、無情にも幕は閉じてしまった。

場内が明るくなり、最後を見届けた観客たちもそぞろに席を立ち、ささやき合いながら退場して行く。その様子をぼんやりと眺めながら、私はまだ座席に座ったまま、今も身動きが取れずにいる。恨めしく深紅の幕を見つめていると一筋の「光のあと」が見えた。「君と僕はその日まで同じ日々を歩んだ。波打ち際光るのは、あなたを思い出す光のあとで」。その映画の終盤で流れた甫木元空の歌声が私の中で再生され続ける。

幕が下りても立ち上がれない

「その映画」は、映画作家の青山真治と私が歩んだ三十年の物語。甫木元は青山のまな弟子。発売されたばかりのピアリストックスのEPに収められた甫木元の楽曲『光のあと』について語り合ったのは二月のこと。「あいつ、声出るようになったよな」と君は目を細めて言った。「甫木元には言わないでくれ」という頼みを守った十カ月、その時がいよいよ迫り、妻のとよた真帆さんと「伝えておかない」と相談し、冷静を装



2016年、甫木元空が監督した映画『はるねこ』のトークショーで青山真治監督(左)と筆者(右)＝大阪市内で

い、ようやく甫木元に伝えたい。二日後、逝ってしまった。

三月二十一日午前零時三十分。その報を最初に聞いたのは私だった。直後に「最後は仙頭さんご夫婦に会ってもらって良かった」とメッセージ。逝去の報道に電話やメールはやむことがない。嗚咽する某俳優は「つらいと思うけど、全部引き受けるのがあなたの義務と使命よ」と言った。

青ちゃん、「その映画」の続きは君の遺志を継いだ仲間と共に進めていくつもりだけど、まだ自信も余裕もないよ。「生きている者の責任」だと励まされたが、座席から立ち上がるには時間がかかりそう。もう少し待ってくれ。

門出多き春の日に私情を書き連ねたこと、皆さま、お許し願います。

(名古屋学芸大学教授、映画プロデューサー)次回掲載は五月五日)